

月刊

いじろのとも

第八卷

二月号

聖人のことば

聖人のことばを

論理で

「あたま」で

理性で

分かるうとする

そして

分かったらしく

屁理屈ばかりを

言う

聖人のことばは

「こころ」で

分かるもの

無意識に

「聖（人類普遍の法）」を

体得したとき

分かるもの

ヨーガをして

瞑想をして

聖なる法を

体得しよう

人生を考え直して

みたい人は(三三八)

『聖書』解説(一四)

三三 さらにまた、昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ。』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。三四 しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。すなわち、天をさして誓ってははいけません。そこは神の御座だからです。三五 地をさして誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。三六 あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです。三七 だから、あなたがたは、『はい。』は『はい。』、『いいえ。』は『いいえ。』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪いことです。

マタイ福音書の第五章を続けます。

男女のあり方(性のあり方・家庭のあり方)を扱った先月号に続いて、今月号の部分もキリスト者にとって、とても難解のようです。

皆さんにも、多分、何を言っているのかよくお分かりにならないのではないかと思います。さっそく、私の受け取り方を述べて行きたいと思えます。

内容は、当時のユダヤ教の事情などを反映して、いろいろ書いてありますが、一口で言えば、誓ってはならない、と言っています。そうではなくて、はいはい、いいえはいえ、だけの世界に徹しなさい、と言っています。これは、心を理解せず、字面に執らわれますと、きわめて分かりにくいようです。

とくに最後の「三七だから、あなたがたは、『はい。』は『はい。』、『いいえ。』は『いいえ。』とだけ言いなさい。」という部分の「言いなさい」が、私には、この聖書を書いた人の理解に合わせた表現になっているように思えます。

聖書の著者は、誓うなどという前半の記述に合わせて、これを書いたのだと思えますが、ここでは、「はいはい、いいえはいえと言いなさい」ではなく、「そういう境地になりなさい」とキリストは言っていると思うの

です。それが理解できないと、今月号の部分は全く分からないことになるのです。

では、「はいはい、いいえはいえ」の境地とはどんな境地なのでしょう。それを、ことばでいうことは不可能なのですが、ここでのことばに合わせて、できるだけ皆さんに理解できそうなことばで言いますと、「あるがまま」の境地のことだと思えます。仏教でいいますと、因縁を超越した如来の世界ですし、老子でいいますと、無為自然の世界です。人間のはからいを超えた世界のことです。それを、客観の世界からながめますと、今後はこうします、ああしますと、ことさらに先のことを誓うことのない、今の「行住坐臥が法にかなう（弘法大師が師匠の恵果和尚を評したことば）」ということだと思います。私の、これまでの解説との関連で少しみておきたいと思えます。

この『聖書』解説シリーズの第一回目から述べていますように、キリストは「神の国」は自分の心の中にあると言っている、私は理解しているのですが、多くのキリスト者は、それは、天にあるように思っているようです。でも、そう思うとこの部分を理解することができません。つまり、自分の心の中が「はいはい、いいえはいえ」という状態だと考えないと分からないのです。

確かに、誓いをするのは、意識的な、外界へ向けた行動ですが、でも、それを超えて自分の無意識に宿る「如来」さま、神さまを自分の中で磨き出さなければ、現実の世界でも「はいはい、いいえはいえ」というようにはならないのです。

私の、モデルで言いますと、「他己」の無意識の中に宿した「如来蔵識（自然蔵識・神髄）」と「自己」の無意識の中に宿した「煩惱蔵識（生命蔵識・精髓）」が統合されたとき、私たちは、神の国を自分の中に実現することができるのです。

なお、この如来の如という字は、もともと「そのようであること」を意味するもので、真如とか如如とも呼ばれます。まさに、これは、「はいはい、いいえはいえ」ということだと言えます。

神の国の、自分の中での実現は、無意識での話です。誓いをするように意識してできることではないのです。ただひたすらキリストの言われることを信じて、修行する以外にないのです。それは、意識の世界で、キリストの言われる戒律を守り、一人静かに祈り（瞑想）をすることです。そうしているとき、知らないうちに無意識の統合が進んでいくのです。

これまでユダヤ教の律法主義を超えるため、私が「た

ましい(自我 人格機能)」とよぶ、建前の世界を超えて「こころ(情動 感情機能)」の重要さをキリストは指摘していることを述べてきましたが、ここでは、キリストもさらに進んで、私が、これまで述べてきました無意識の世界のことを言っているのです。

無意識の世界が廃れるとき、あるいは達成できないとき、「こころ」が大切になります。それは、中国、特に孔子では「仁」と呼ばれます。そして、さらに「こころ」「仁」が廃れるとき、「たましい」「律法」が大切になってくるのです。

ですから、いくら律法を守れと言っても、仁が廃れていれば、形式だけのものとなります。たとえば、手島郁郎著の『マタイ伝講話』(キリスト聖書塾刊)第二巻の一七五頁によりますと、敵に追われているものが、ベドウインの天幕などに逃げ込んで助けを求めると、彼らは「おれの天幕にいる間は、大丈夫。守ってやる。」と保証します。その通り、本当に客として大事にしますが、しかし一旦その天幕を出たら、バツサリ殺して持ち物を奪う。誓いは充分守った。しかし、家を出たら別の話だというわけです。約束を守るべしという律法を形式的には守ったということなのでしょう。なお、広辞苑によりますと、ベドウインは、アラビア半島砂漠部のラクダ遊

牧民で、アブラハムの後裔である「真のアラビア人」と自称し、定住農耕民や半遊牧民に比べて最も高貴な者であると自負している、ということでした。

このように、律法の基礎には仁がいるわけですが、では、儒教の言うように仁さえあれば、この世から差別がなくなり、争いのない、幸せな世界になるかと言いますと、そうは行きません。

なぜかと言いますと、律法が分かり、仁を尊重しなければいけないと思っても、人はその通りにはできないからです。自分が、ある現場的状况に巻き込まれますと、自己を護ろうとする執着や煩惱が、そうした律法や仁の心を麻痺させてしまうからです。知らないうちに、自己を護ってしまうのです。自分は正しいことをしていると、悪をなしてしまうのです。現代人の多くがそうしているようにです。

ここで、キリストが説きたいのは、そういうことなのです。これまで出てきたところでは、律法の基礎にあるこころを大切にすることを説いていましたが、ここに至って、こころの底にある「はいをはいとし、いいえをいいえとする」人間のはからいを超えた「如」の世界が大切であることを説いているのです。でも、殆どのキリスト者に理解されていません。とても、残念なことです。

自作詩短歌等選

聖人の教えを行え

聖人の
教えを守り
行えと
ひごと教えて
いくなれば
やがて自製の
ちから得て
人を信じ
人のため
尽くすところが
育つて来るに

他己の弱い人の一特徴

他己が弱い人の
一つの特徴
ものごとを
やりつばなしにする
自分が出たら
ドアを開けつびろげの
ままにして
いつてしまう

自己主張と社会崩壊

人のこと
社会のことに
目を向けて
自分の意見
表明すべし
自らを
反省させず
ひとのこと
ばかりに目を向け
自己主張
することばかり
教えたら
いつか社会は
崩壊をする

解脱の証拠

釈尊
ソクラテス
老子
キリスト
これら四聖は
解脱していた
という証拠を
示している
でも
普通の人は
理解できない
だから
分からない人は
ただ
信じて
従うのみ
それが信仰

食べたことなき味

したことの
無き解脱を
口にすることは
食べたこと無き
食べ物
の味を云々
するに似ている

真如と一つ

因縁で
この世にあるを
超越す
己がこころの
奥底の
真如と一つ
我がいのちなり

まよい深める

真実を
求めあたまで
哲学を
するは結局
まよい深める

自作随筆選

妄信と人類普遍の教え

周知の通り、オウム真理教事件で、印象的だったことの一つは、一流大学出のエリート達が、馬鹿げた教理をやすやすと信じ、それにしたがって多くの過ちを犯したことです。

これは、かつて、マルクス主義を信じ、同じように多くの過ちを犯した「過激派」に似ていますが、オウム真理教の場合は、無差別な殺人を目指したことで、大きな相違があるように思います。

でも、いずれの場合でも、なぜこつもやすやすと現実離れた理論なり教理なりを信じたのでしょうか。

ある評論家は、学校教育がもつと疑うことを教えないからだと言っていました。私は、それは逆だと思っています。つまり、信じることを教えないから、間違った教理や理論を信じてしまうのだと思うのです。そのことを少し具体的に検討してみたいと思います。

私は、かつて、衆愚政治（オクロクラシー）について書いたことがあります（『こころのとも』第七卷十一月

号)。これを読んだある人が、「あなたの言う通り、

『三人寄れば文殊の智慧』ということわざ通りにはいかず、普通の人（凡愚）が何人寄っても、一人の解脱した聖人にはかなわないことは分かる。でも、聖人であることをどうして判断すればいいのか」という質問をしてくれました。なるほど、現代人の誰でもが抱く疑問のようで、私が説明したくなる、よい質問だと思います。

現代人は、民主主義教育のおかげか、一人ひとりが自分の判断をもつことをよいことと考えています。ですから、自分の「あたま」で判断して、それによって行動を決定します。自分の目で見、耳で聞いたことが真実だと考えています。それに基づいて考え、判断したことが、つまり、理性的に考え判断したことが、最高のことだと考えているのです。それ以外に真実はありえないと考えているのです。それは、実は、そうした教育を子どものときから受けて来た結果ですし、また、それをよいこととして次の世代の子どもにも教育していて、それが再生産され、発展しているからだと思います。

ここに、前述の質問がでてきた根拠があるのです。何百億人の凡愚が寄ろうと、聖人に及ばないということが本当は分かっていることによるのです。それは、ゼロをいくら加算してもゼロで、けっして一にはならないの

と同じなのです。

実は、現代人がするように、自分の外をいくら見ても、人間としての真実は得られません。それは、自分の中のぞくことによつてのみ得られるものなのです。自分の中に宿した「如来蔵識（自然蔵識・神識）」を磨き出すことによつてのみ得られるのです。

こうすることは、特別の人にだけ可能のように考えるかもしれませんが、そうではありません。誰でももっている心の働きなのです。ただ、それを修行によつて実感した人だけが、実現できます。それを実現した人を、私たちは聖人と呼んでいるだけなのです。

そうなったとき、老子が言いますように、誰でもが、「無為自然・無為而無不為」という境地に至るのです。窓の外を覗かないでも、全てを知ったと思えるのです。そうした人が、私の言っています、ソクラテス、釈尊、老子、キリスト、の四聖なのです。

ですから、こうした人の教えは、目で見、耳で聞いたりして、窓の外を覗いて得られた相対的な教えではありません。だれでもが心に宿した「人類普遍の法（宇宙根源の原理）」と呼べる心の中の教えなのです。

自分で判断することのみが、最高のことだと考える現代人は、こうした人類の歴史に耐え続けてきた聖人の教

えさえも、ないがしろにしています。

なぜなら、自分の「あたま」で判断したこのみが、正しいことだと考える立場では、そうした、「あたま」を超えた、心の奥底の教えを理解することは出来ないからです。ですから、まず、現代人にとって大切なことは、そうした人たちの教えを自分を超えた、自分の至りえない「すばらしい教え」として「信じる」ことなのです。理解するのではなくて、信じるのです。

そして、次の時代を担う子どもにも、小さい時から、それを教えるのです。

自分で判断するのではなく、そうした教えに則っているかどうかを、教えに照らして判断させ、反省させるのです。もし、子どもの集団としての行為が問われているときは、そのことをみんなで話し合わせるのです。議論させるのです。

なのに、現代人は、自分を基準として判断しようとしています。また、子どもにも、一人一人が自分の意見を持ち、自分で判断するように教えています。そこに現代の最大の誤りがあります。

いま、日本でそうなっています。自分を基準として判断しますと、自分の利害得失といった欲や好悪の感情などに執らわれる結果を生むのです。それを自分の「あ

たま」で制御することは出来ないのです。実は、人間は無意識の如來藏識に至るときだけ、自己を制御し、他者を尊重することができるようになるのです。

ということは、自分を判断の基準とする限り、いつまでたっても、争いが止むことはありません。争いを止めるには、自分を捨てて、他者に、つまり、無意識の如來さまに、絶対に帰依するときだけなのです。そのときだけ、争わなくてもよくなるからなのです。

ですから、人間が判断するときの基準は、自分ではなく「人類普遍の教え」法」に照らして、判断しなければなりません。正しいかどうか、善いことであるかどうかを、法に従い、法に則って、議論し判断しなければなりません。それは、個人の利害や好悪に優先するのです。ましてや、恨みや妬みに執らわれてはなりません。

そのことを子どものときから、教え、反省させなければなりません。「人類普遍の教え」法」を教え、自分の行為がそれに則ったものだったかどうかを反省させなければならぬのです。そして、それと同時に、自己を覗き込む修行をさせなければなりません。「あたま」で分かたぐらいでは人間は救われぬからです。「人類普遍の教え」法」を理解することも、それを信じ、それに従うこともできないのです。

釈尊のつとば（五四）

法句経解説

（一九〇、一九一）さとれる者（＝仏）と真理のことわり（＝法）と聖者の集い（＝僧）とに帰依する人は、正しい智慧をもって四つの尊い真理を見る。
すなわち 苦しみと、 苦しみの成り立ちと、
苦しみの超克と、 苦しみの絶滅におもむく八つの尊い道（八聖道）とを（見る）。

この偈は、釈尊の教えの根幹の一部をなすものと言えます。つまり、「仏法僧の三宝への帰依」と、釈尊が悟りを開かれた後、最初の説法である「初転法輪」で説かれた、あの有名な教えの中の「四諦、八聖道」とです。なお、初転法輪には、異論はあるようですが、この他に中道が含まれるとされています。

この「四諦、八聖道」の教えは、このようにセットにして、仏教の解説書には、必ず紹介されています。詳しくはそれらをご覧頂きたいと思います（例えば、岩波新書にある、渡辺照宏著『仏教第二版』、三枝充恵著『仏教入門』など）。

ここでは、この教えをごく簡単に紹介し、私の考えを

少し述べさせて頂きます。

まず、三宝の一番目の仏ですが、これは、悟りをひらかれた人のことで、私が、四聖と言っています、釈尊、老子、ソクラテス、キリストのような人のことです。釈尊の寂滅後、千年ほどたつて整備された密教では、大日如来を「宇宙の真理そのもの・宇宙根源の原理」を表す本尊（法身）とし、釈尊もその現れとしています。キリスト教で言えば、神（法身）と神の子としてのキリストのようなものだと考えられます。いずれでもいいのですが、要するに私たちのなすべき、あるいは、仰ぎ信ずべき「人格」としての仏です。

次に、二番目の法ですが、これは、仏の説かれる教えのことで、私が「人類普遍の教え」と言っているものです。それは絶対の真理と言えます。私たち、相対な者は「自分が正しい」と判断した途端に、間違いを犯しているものです。常に、法に照らして、それに背いていないかどうか反省しなければなりません。法はその基準となるものです。聖人を必要としないとする、現在の個人主義的な民主主義では、個人一人ひとりがそれぞれ判断して意見を表明し、その中から正しい真理が選択され、行われると考えていますが、いま述べましたように、相対な者は、自分が正しいと判断した途端に、間違いを犯す

ものです。ですから、こんな考え方で社会が進んでいきますと、人類・社会は、必ず滅亡に至ります。

次に、三番目の僧ですが、仏と法を信奉する人々、つまり僧侶の集団のことです。僧は、本来は仏の境地に達すべく、自分が修行、精進するとともに、他者（特に在家の人たち）に法を施し、救う役割を担っています。ですから、仏と法を信じる人は、仏と法に帰依すると同様に、僧団にも帰依しなければなりません。人間は弱いものです。常に、身近に、真剣に修行に励む人や悟りに達した人の刺激を受けていないと、墮落してしまうものなのです。今は、末法の時代で、日本では僧侶自身が死者の供養や観光仏教などに墮落して、滅多に真剣に修行していませんし、解脱した人も滅多にいませんので、刺激を与えることもできません。また、衆生も大多数は、そうした人を求めてもいませんし、聞く耳も持っていない。ですから、たとえ解脱した人がいても全く分かりません。ですから、信じもしません。悲しいかなです。

次に「四諦、八正道」に移ります。

四諦は、偈にありますように、四つの尊い真理のことです。その四つとは 苦諦（くたい）＝人生の苦しみとは何か、 集諦（じつたい）＝苦の起源はどこにあるのか、 滅諦（めつたい）＝苦を克服するとはどういうこ

とか、 道諦（どうたい）＝苦を滅するにはどうしたらよいか）です。

まず、苦諦ですが、これは、四苦八苦と呼ばれる苦について説きます。四苦とは生老病死です。八苦は、この四苦に、怨憎会苦（おんぞうえく）＝怨み憎む人に会う苦しみ、愛別離苦（あいべつりく）＝愛する者と別れる苦しみ、求不得苦（ぐふとつく）＝欲しいものが手に入らない苦しみ、五蘊盛苦（ごうんじょうく）＝人間的存在を構成する物質的・精神的五種の要素・色受想行識からうける苦しみ）の四つを加えたものです。

次に、集諦ですが、これは、苦の起源を渴愛（のど）の渴きのような強い欲望（とします。それは、感覚的欲望（欲愛）、生存への欲望（有愛）、生存の断絶への欲望（無有愛）の三つから成ります。

次に、滅諦ですが、これは、欲望を残りなく滅ぼし、断念し、放棄し、解脱し、欲望に執着しないことで、苦を克服することができる（と説いています）。

その克服の具体的な方法が、最後の 道諦です。それは、偈にありますように、八つの尊い道・八聖道であり、中道でもあるわけです。では、八聖道とは何なのでしょ

うか。それは、次の八つを言います。

正見（しょうけん＝正しい見方）

正思（しょうし＝正しい思い）

正語（しょうご＝正しいことば）

正業（しょうごう＝正しい行い）

正命（しょうみょう＝正しい生活）

正精進（しょうしょうじん＝正しい努力）

正念（しょうねん＝正しい気づかい）

正定（しょうじょう＝正しい精神統一）

実は、既に、第二巻三月号（平成三年）に「八正道ということ」と題して、随筆を載せていました。お持ちの方は、もう一度取り出してお覧頂きたいと思います。ここでは、仏教学者の増谷文雄氏がこの八正（聖）道を次の四つに分けて考えていることが紹介されています。

一、正見（基本的立場としての見方が正しいこと）

二、正思 正語 正業（身口意の正しいこと）

三、正命（正しい生業に従事すべきこと）

四、正精進 正念 正定（修行の仕方が正しいこと）

そして、正しいという条件として、妄見を離れる、顛倒を離れる、極端を離れる（中道）、の三つをあげています。

こうした八聖道が完全に実行できるためには、実は、悟りをひらいていなければなりません。でも、釈尊の

教えに従って、つまり、仏法僧の三宝に帰依し、四諦をよく知り、戒律を守って生活を正しく律し、ひたすらこころを磨いていけば、ありがたいことに、どこまでも悟りに近づいているのです。

でも、現在の日本では、苦しみが少なくなっています。大多数の人が、昔の殿さまのような暮らしをしています。子どもたちも、ほとんど苦労を知りません。食べるものは、無制限にあり、残飯を平気で捨てて無駄にします。また、着るものも一年も着れば、流行遅れになって捨ててしまいます。家には、手伝うべき家事はほとんどありません。辛い風呂への水汲みも、風呂炊きも、冷たい水でする辛い洗濯も、田畑での辛い肉体労働も無くなりました。また、死はますます生活の場から隠され、家庭で実感することができなくなっています。病気も、医者が治してくれるものになりました。また、今では年をとっても、子どもの世話になることもなく、年金を貰い、老人ホームで、大切に保護されて暮らすことができます。昔の殿さまでも、敵や仲間、いつ寝首を掻かれるかと心配しながら暮らしたと思いますが、今ではそんなことも心配りません。克服すべき苦しみも、もう無くなってしまうのでしょうか。私には、もっと大きな苦しみが、そこに迫っているように思えるのですが。

後記

- 一、私の勤める大学の教授会で、例の教授の方について、退職勧告決議付きの、十二月月停職の懲戒処分原案が可決されました。退職勧告の理由は倫理が問われていることです。翌日の新聞では、学長がたとえ本人が退職勧告決議を受け入れないで、一年後に大学に復帰しても、授業はもたせないと述べたと報道していました。
- 二、いま大学には、悪意と怨念がみなぎっているように私には感じられます。嘆かわしいことです。
- 三、前にも書きましたが、キリストは人を裁くなど言われています。また、釈尊も怨みに怨みをもって返すなど言われています。この二聖人の倫理は絶対な倫理だと、私は考えています。
- 四、こうした意見を教授会で述べますが、ほとんど耳を傾ける人はいません。私も、逆恨みをされているのではないかと思います。
- 五、二聖人の倫理からすれば、裁いた人たちや怨みに怨みを返した人たちが、ながい目で見れば、逆に裁かれ、怨みをもって返されることになると思います。
- 六、その結果、本人たちが不幸を味わうことになるかもしれませぬし、大学が、ますます世間からうとまれて、ついに崩壊に至るかもしれませぬ。真の倫理を示すべき

大学が、世の中の相対な倫理に流されて、人類・宇宙普遍的の教えに逆らって生きていくわけですから、天は必然・自然として、天罰を与えることになるのだと思います。七、一月二十日（月）に、徳島県鴨島町の小・中学校同和教育研究会で「目指すべき人権教育のあり方」と題して、講演させて頂きました。九十人ほどの先生方が、熱心に聞いて下さいました。後で懇親会がありましたが、いろいろ先生方と話し、まだまだ教育に情熱をもっておられる方があると感じました。

八、蔵書が増えて、古本屋さんでよく同じ本を買ってまいります。パソコン入力するよう準備をしています。

月刊	平成九年二月八日
こころのとも	〒772 8502
第八巻	徳島県鳴門市鳴門町高島
二月号	鳴門教育大学 障害児教育講座気付
(通巻 八十六号)	(ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（よ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

